

2014年度春季大会シンポジウム 「気象学における科学コミュニケーションの在り方」の報告

はじめに

茂木 耕作*1・川瀬 宏明*2・小玉 知央*3

2014年5月23日、横浜市開港記念会館講堂の2階席まで埋めた400名超の参加者、講演者の納口恭明氏(防災科学技術研究所)、岩谷忠幸氏(気象キャスターネットワーク)、江守正多氏(国立環境研究所)、そして運営スタッフ。この日、会場に集まった全ての人々が真剣に向き合い、「現象の本質を躍動感に満ちた対話から体感する」、「マスメディア“で”伝える、マスメディア“に”伝える」、「客観中立とは何かに改めて向き合う」という3方向のテーマに沿って、3時間半に及ぶ対話が体現された。大きな歓声や全員総立ちでの議論、問いかけに応える挙手、さまざまな形で参加者にとっての「科学コミュニケーションの在り方」を実践していただいた。

今回のシンポジウムは、国民の生活、経済、政策に至るまで、情報伝達の重要性が極めて高い気象学において、科学コミュニケーションの重要性を改めて問い直す機会として企画された。シンポジウムを通じて、気象学を必要とする人々との対話に立ち返り、情報伝達の在り方と研究発展へのフィードバックについて、多面的に議論できたと思われる。本稿では、3名の講演者の講演、及び本シンポジウムのアンケートをもと

にした分析などを報告する。シンポジウムの全容、及び冊子(PDF版)を含めた関連資料は、YouTubeチャンネル(第1図上)とFacebookイベントページ(第1図下、<https://www.facebook.com/events/251398138344803/>)で公開されているので、本稿と併せてご覧頂きたい。



第1図 本シンポジウムのYouTubeチャンネル(上)とFacebookイベントページ(下)。

*1 (連絡責任著者) 海洋研究開発機構。

moteki@jamstec.go.jp

*2 気象庁気象研究所。

*3 海洋研究開発機構。

—2015年1月22日受領—

—2015年5月11日受理—

謝 辞
講演者の納口恭明氏，岩谷忠幸氏，江守正多氏，そして準備から本番に至るまでお手伝いいただいた海洋
研究開発機構の山崎氏，諸橋氏をはじめとする多くの
方々に感謝申し上げたい。

Science Communication in Meteorology
(A Report on the Symposium of the 2014 Spring
Assembly of the Meteorological Society of Japan)

Qoosaku MOTEGI*¹, Hiroaki KAWASE*² and Chihiro KODAMA*³

*¹ (*Corresponding author*) Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology, 2-15 Natsushima-Cho, Yokosuka, Kanagawa 237-0061, Japan.

*² Meteorological Research Institute, Japan Meteorological Agency.

*³ Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology.

(Received 22 January 2015; Accepted 11 May 2015)

Contents

1. Yasuaki NOUGUCHI: Dr.“NADARE”nger Presents Scientific Experiments on Natural Disaster.
 2. Tadayuki IWAYA: Can We Understand Each Other? —The Mass Media and Meteorologists—
 3. Seita EMORI: Are We Able to Be Objective, Neutral, and Scientific?
 4. Chihiro KODAMA: Questionnaire Results.
-